

大つごもり 十三夜

他五篇

樋口一葉作



2円の借金を返さなければ年越がで
きぬ伯父のために、主家の金を盗む
お峰の心の動揺をつぶさに追う『大
つごもり』、父に諭され再び夫のもと
へ帰る途中、幼なじみに会うお関
を描く『十三夜』、他に5篇を収録。
いずれも冷酷な社会に生きる女た

ちの、あきらめの姿を写してその可憐な心情に迫り、
よく人生流転の相を描き出す。(解説 = 前田 愛)



緑 25-2
岩波文庫

おお 大つごもり・^{じゅうさんや}十三夜 他五篇

1979年2月16日 第1刷発行©
1990年10月5日 第15刷発行

定価 310 円
(本体301円)

作 者 ひ 樋 ぐち 口 いち 一 よう 葉

発行者 安 江 良 介

〒101-02 東京都千代田区一ツ橋2-5-5

発行所 齋 岩 波 書 店

電話 03-265-4111

印刷・精興社 製本・田中製本

落丁本・乱丁本はお取替いたします

Printed in Japan
ISBN4-00-310252-5

岩 波 文 庫

31-025-2

大 つ ご も り
十 三 夜

他 五 篇

樋 口 一 葉 作

目次

大つごもり	五
ゆく雲	二五
十三夜	四五
うつせみ	七一
われから	八九
この子	一三五
わかれ道	一四九
解説（前田愛）	一五

大
つ
ご
も
り

(上)

井戸は車にて綱の長さ十二尋、勝手は北向きにて師走の空のから風ひゆう／＼と吹ぬきの寒さ、おゝ堪えがたと竈の前に火なぶりの一分は一時にのびて、割木ほどの事も大台にして叱りとばさるゝ婢女の身つらや、はじめ受宿の老嫗さまが言葉には御子様がたは男女六人、なれども常住家内にお出あそばすは御総領と末お二人、少し御新造は機嫌かいなれど、目色顔色を吞みこんで仕舞へば大した事もなく、結句おだてに乗る質なれば、御前の出様一つで半襟半がけ前垂の紐にも事は欠くまじ、御身代は町内第一にて、その代り客き事も二とは下らねど、よき事には大旦那が甘い方ゆゑ、少しのほまちは無き事も有るまじ、厭やに成つたら私しの所まで端書一枚、こまかき事は入らず、他所の口を探せとならば足は惜しまじ、何れ奉公の秘伝は裏表と言ふて聞かされて、さても恐ろしき事を言ふ人と思へど、何も我が心一つで又この人のお世話には成るまじ、勤め大事に骨さへ折らば御氣に入らぬ事も無き筈と定めて、かゝる鬼の主をも持つぞかし、目見えの済みて三日の後、七歳になる嬢さま踊りのさ

らひに午後よりとある、其支度^{そのしたく}は朝湯にみがき上げてと霜氷る曉、あたゝかき寢床^{うも}の中より
 御新造^{ごしんぞ}灰吹きをたゞきて、これこれと、此詞^{これ}が目覚しの時計より胸にひゞきて、三言^{みこと}とは呼
 ばれもせず帯より先に襷^{たすき}がけの甲斐^{かひ}々々しく、井戸端^{いどばた}に出れば月かけ流しに残りて、肌^{はだ}を刺
 すやうな風の寒さに夢を忘れぬ、風呂は据風呂^{すふろ}にて大きからねど、二つの手桶に溢るゝほど
 汲みて、十三は入れねば成らず、大汗に成りて運びけるうち、輪宝^{りんぼう}のすがりし曲み齒^{ゆがば}の水ば
 き下駄^{まへばなを}、前鼻緒^{まへばなを}のゆる／＼に成りて、指を浮かさねば他愛^{たわい}の無きやう成し、その下駄にて重
 き物を持ちたれば足もと覺束^{おぼつか}なくて流し元の氷にすべり、あれと言ふ間もなく横にころべば
 井戸がはにて向ふ臍^{へか}したゝかに打ちて、可愛や雪はづかしき膚^{はだ}は紫の生々^{なま／＼}しくなりぬ、手桶
 をも其処^{そこ}に投出^{なげいだ}して一つは満足^{なり}成しが一つは底ぬけに成りけり、此桶^{これ}の価^{あたひ}なにはどうか知らね
 ど、身代^{しんだい}これが為につぶれるかの様に御新造^{ごしんぞ}の額際^{ひたへぎは}に青筋おそろしく、朝飯^{あさはん}のお給仕より睨^{にら}
 まれて、其日^{そのひ}一日物^{もの}も仰せられず、一日おいてよりは箸^あの上げ下しに、此家^{このや}の品は無代^{たど}では
 出来ぬ、主^{しゆう}の物とて粗末に思ふたら罰^{ばち}が当るぞえと明け暮れの談義、来る人毎^{ごと}に告げられて
 若き心には恥かしく、其後^{そのこ}は物ごとに念を入れて、遂^つひに龜想^{そそう}をせぬやうに成りぬ、世間に
 下女つかふ人も多けれど、山村^{やまむら}ほど下女の替^{かは}る家は有^{ある}まじ、月に二人は平常^{つね}の事、三日四日

に帰りしもあれば一夜居て逃出しもあらん、開闢以来を尋ねたらば折る指に彼の内儀さまが袖口おもはるゝ、思へばお峯は辛棒もの、あれに酷く当たたらば天罰たちどころに、此後は東京広しといへども、山村の下女に成る物はあるまじ、感心なもの、美事の心がけと賞めるもあれば、第一容貌が申分なしだと、男は直きにこれを言ひけり。

秋より只一人の伯父が煩ひて、商売の八百や店もいつとなく閉ぢて、同じ町ながら裏屋住居に成しよしは聞けど、六づかしき主を持つ身の給金を先きに貰へば此身は売りたるも同じ事、見舞にと言ふ事も成らねば心ならねど、お使ひ先の一寸の間とても時計を目当にして幾足幾町と其しらべの苦しき、馳せ抜けても、とは思へど悪事千里といへば折角の辛棒を水泡にして、お暇ともならば弥々病人の伯父に心配をかけ、瘦世帯に一日の厄介も氣の毒なり、其内にはと手紙ばかりを遣りて、身は此処に心ならずも日を送りける。師走の月は世間一躰物せわしき中を、こと更に選らみて綾羅をかざり、一昨日出そろひしと聞く某の芝居、狂言も折から面白き新物の、これを見のがしてはと娘共の騒ぐに、見物は十五日、珍らしく家内中との触れに成けり、此お供を嬉しがるは平常のこと、父母なき後は唯一人の大切な人が、病ひの床に見舞ふ事もせで、物見遊山に歩くべき身ならず、御機嫌に違ひたらば夫れまでとし

て遊びの代りのお暇いとまを願ねがひしに流石さすがは日頃の勤めぶりもあり、一日すぎての次の日、早く行きて早く帰れと、さりとて気まゝの仰おほせに有難うぞんじますと言ひしは覚えで、頓やがては車の上もどに小石川はまだかまだかと鈍もどかしがりぬ。

初音町はつねてうといへば床ゆかしけれど、世をうぐひすの貧乏町びんぼうてうぞかし、正直安兵衛とて神は此頭このかうべに宿り給ふべき大薬罐おほやくわんの額ひたいきはびかくとして、これを目印めじるしに田町たまちより菊坂きくざかあたりへかけて、茄子なすび大根だいこんの御用をもつとめける、薄元手うすもとてを折をりかへすなれば、折をりから直ねの安うて嵩かさのある物より外ほかは棹さほなき舟に乗合のりあひの胡瓜きうり、苞つとに松茸まつたけの初物などは持たで、八百安やをやすが物は何時いつも帳面につけた様ようなと笑はるれど、愛顧あいこは有がたきもの、曲りなりにも親子三人の口をぬらして、三之助とて八歳やっになるを五厘学校ごりんがっこうに通はするほどの義務つとめもしけれど、世の秋つらし九月の末、俄にかに風が身にしむといふ朝、神田に買出しの荷を我が家やまでかつぎ入れるを其そのまゝ、発熱はつねつにつゞいて骨病ほねやみの出いでしやら、三月ごしの今日まで商あきなひは更なる事、段々たに喰たべへらして天秤てんびんまで売しる仕義しぎになれば、表店おもてだなの活計くわくしたちがたく、月五十銭の裏屋ひとめに人目の恥いとを厭いとふべき身ならず、又時節が有らばとて引越ひきこしも無惨や車に乗するは病人ばかり、片手に足たらぬ荷をからげて、同じ町の隅へと潜みぬ。お峯は車より下りて开処そここち此処と尋ぬるうち、風紙風船たこなどを軒につ

るして、子供を集めたる駄菓子やの門に、もし三之助の交じりてかと覗けど、影も見えぬに落胆して思はず往来を見れば、我が居るよりは向ひのがはを瘦ぎすの子供が薬瓶もちて行く後姿、三之助よりは丈も高く余り瘦せたる子と思へど、様子の似たるにつか／＼と駆け寄って顔をのぞけば、やあ姉さん、あれ三ちゃんでも有つたか、さても好い処でと伴なはれて行に、酒やと芋やの奥深く、溝板がた／＼と薄くらき裏に入れば、三之助は先へ駆けて、父さん、母さん、姉さん連れて帰つたと門口より呼び立てぬ。

何お峰が来たかと安兵衛が起上れば、女房は内職の仕立物に余念なかりし手をやめて、まあ是れは珍らしいと手を取らぬばかりに喜ばれ、見れば六畳一間に一間の戸棚只一つ、箆長持はもとより有るべき家ならねど、見し長火鉢のかげも無く、今戸焼の四角なるを同じ形の箱に入れて、これがそも／＼此家の道具らしき物、聞けば米櫃も無きよし、さりとて悲しき成ゆき、師走の空に芝居みる人も有るをとお峯はまづ涙ぐまれて、まづ／＼風の寒きに寝てお出なされませ、と堅焼に似し薄蒲団を伯父の肩に着せて、さぞさぞ沢山の御苦労なさりましたろ、伯母様も何処やら瘦せが見えまする、心配のあまり煩ふて下さりますな、夫れでも日増しに快い方で御座んすか、手紙で様子は聞けど見ねば氣にかゝりて、今日のお暇を

待ちに待つて漸との事、何家などは何うでも宜ござります、伯父様御全快にならば表店に出
 るも訳なき事なれば、一日も早く快く成つて下され、伯父様に何ぞと存じたれど、道は遠し
 心は急く、車夫の足が何時より遅いやうに思はれて、御好物の飴屋が軒も見はぐりました、
 此金は少々なれど私が小遣の残り、麴町の御親類よりお客の有し時、その御隠居さま寸白の
 お起りなされてお苦しみの有しに、夜を徹してお腰をもみたれば、前垂でも買へとて下され
 た、それや、これや、お家は堅けれど他処よりのお方が最負になされて、伯父さま喜んで下
 され、勤めにくくも御座んせぬ、此巾着も半襟もみな頂き物、襟は質素なれば伯母さま懸け
 て下され、巾着は少し形を換へて三之助がお弁当の袋に丁度宜いやら、夫れでも学校へは行
 ますか、お清書が有らば姉にも見せてと夫れから夫れへ言ふ事長し。七歳のとしに父親得意
 場の蔵普請に、足場を昇りて中ぬりの泥鰻を持ちながら、下なる奴に物いひつけんと振向く
 途端、厩に黒ぼしの仏滅とでも言ふ日で有しか、年来馴れたる足場をあやまりて、落たるも
 落たるも下は敷石に模様がへの処ありて、掘おこして積みたてたる切角に頭脳したゝか打ち
 つけたれば甲斐なし、哀れ四十二の前厄と人々後に恐ろしがりぬ、母は安兵衛が同胞なれば
 此処に引取られて、これも二年の後はやり風俄かに重く成りて亡せられたれば、後は安兵衛夫婦

を親として、十八の今日まで恩はいふに及ばず、姉さんと呼ばれるれば三之助の弟のやうに可愛く、此処へ此処へと呼んで背を撫で顔を覗いて、さぞ父さんが病気で淋しく愁らかる、お正月も直きに来れば姉が何ぞ買つて上げますぞえ、母さんに無理をいふて困らせては成りませぬと教ゆれば、困らせる処か、お峯聞いて呉れ、歳は八つなれど身軀も大きし力もある、私が寐てからは稼ぎ人なしの費用は重なる、四苦八苦見かねたやら、表の塩物やが野郎と一処に、蜆を買ひ出しては足の及ぶだけ担ぎ廻り、野郎が八錢うれば十錢の商ひは必らずある、一つは天道さまが奴の孝行を見徹してか、兎なり角なり薬代は三が働き、お峯はめて遣つて呉れとて、父は蒲団をかぶりて涙に声をしぼりぬ。学校は好きにも好きにも遂ひに世話をやかしたる事なく、朝めし喰べると馳け出して三時の退校に道草のいたづらした事なく、自慢では無けれど先生さまにも褒め物の子を、貧乏なればこそ蜆を担がせて、此寒空に小さな足に草鞋をはかせる親心、察して下されとて伯母も涙なり。お峯は三之助を抱きしめて、さてもさても世間に無類の孝行、大がらとても八歳は八歳、天秤肩にして痛みはせぬか、足に草鞋くひは出来ぬかや、堪忍して下され、今日よりは私も家に帰りて伯父様の介抱活計の助けもしまする、知らぬ事とて今朝までも釣瓶の繩の氷を愁らがつたは勿躰ない、学校ざかり

の年に虱しじみを担かつがせて姉が長い着物きて居ゐりようか、伯父さま暇いとまを取つて下され、私は最早
 奉公はよしますると取乱して泣きぬ。三之助はをとなしく、ほろりほろりと涙のこぼれる
 を、見せじとうつ向きたる肩のあたり、針目あらはに衣きぬ破れて、此肩こゝに担かつぐか見る目も愁つら
 し、安兵衛はお峯が暇いとまを取らんと云ふに夫それは以ての外ほか、志しは嬉しけれど帰りてからが女
 の働き、夫それのみか御主人へは給金の前借まへかりもあり、それッ、と言ふて帰られる物では無し、
 初奉公ういばうこうが肝腎、辛棒がならで戻つたと思はれても成らねば、お主しう大事に勤めて呉れ、我が
 病氣やまひも長くは有るまじ、少しよくば氣の張弓はりゆみ、引つゞいて商ひもなる道理、あゝ今半月いまはんつきの今
 歳としが過れば新年はるは好き事も来たるべし、何事も辛棒く、三之助も辛棒して呉れ、お峯も辛
 棒して呉れとて涙を納めぬ。珍らしき客に馳走は出来ねど好物の今川焼いまがはやき、里芋の煮ころがし
 など、沢山たべろよと言ふ言葉が嬉し、苦勞はかけまじと思へど見す見す大晦日おほみそかに迫りたる
 家の難義、胸に痞つかへの病やまひは癩しやくにあらねどそもく床とこに就きたる時、田町たまちの高利かしより三月みつぎ
 しぱりとして十円かりし、一円五拾銭は天利てんりとて手に入りしは八円半、九月の末よりなれば此
 月つきは何うでも約束の期限なれど、此中このなかにて何なんとなるべきぞ、額ひたひを合せて談合の妻は人仕事ひとしごとに
 指先より血を出いだして日に拾銭の稼かせぎも成らず、三之助に聞かすとも甲斐なし、お峯が主しゆうは

白金の台町に貸長屋の百軒も持ちて、あがり物ばかりに常綺羅美々しく、我れ一度お峯への用事ありて門まで行しが、千両にては出来まじき土蔵の普請、羨やましき富貴と見たりし、その主人に一年の馴染、氣に入りの奉公人が少々の無心を聞かぬとは申されまじ、此月末に書かへを泣きつきて、をどりの一両二分を此処に払へば又三月の延期にはなる、斯くいはい欲に似たれど、大道餅買ふてなり三ヶ日の雑煮に箸を持せずば出世前の三之助に親のある甲斐もなし、晦日までに金二両、言ひにくく共この才覚たのみ度よしを言ひ出しけるに、お峯しばらく思案して、よろしう御座んす慥かに受合ひました、むづかしくばお給金の前借にしとなり願ひましょ、見る目と家内とは違ひて何処にも金銭の埒は明きにくけれど、多くでは無し夫れだけで此処の始末がつくなれば、理由を聞いて厭やは仰せらるまじ、夫れにつけても首尾そこなうては成らねば、今日は私は帰ります、又の宿下りは春永、その頃には皆々うち寄つて笑ひたきもの、とて此金を受合ける。金は何として越す、三之助を貰ひにやろかとあれば、ほんに夫れで御座んす、常日さへあるに大晦日といふては私の身に隙はあるまじ、道の遠きに可憐さうなれど、三ちゃんを頼みます、昼前のうちに必らず必らず支度はして置まするとて、首尾よく受合ひてお峯は帰りぬ。